EAPEA ニュースレター

2012 年 6 月 16 日
第 4 号

発行元：NPO 法人東アジア政経アカデミー
発行元連絡先：〒173-0004 東京都板橋区板橋 2-64-5 グレイスビル 402 号 電話＆FAX：03-5944-1779
URL：http://www1.ocn.ne.jp/~eapea/ e-mail：eapea@diary.ocn.ne.jp

この号の内容

1 冒頭挨拶
活動報告
■大東文化大学特別講義

2 研究活動報告
■日・韓福祉国際セミナー

3 会員からの便り①
■初めての木浦市訪問（松浦勉）
■至福の人生路（河正雄）
■震災から 14 カ月、区内外国人減少に歯止め、回復傾向へ（長瀬達也）

4 会員からの便り②
■ソウル通信③―愛犬パル・韓国との結縁（佐々木憲文）
■抵抗の象徴「三別抄」（薄葉威士）
編集後記

冒頭挨拶

東アジア政経アカデミー代表　永野慎一郎

東アジア政経アカデミーを創設してから２年を経過しました。2010 年９月、特定非営利活動法人として東京都から認可を受け、本格的な活動を始めております。私の縁故地である東京板橋区と韓国木浦市の交流の推進から始めました。木浦と縁のある田内千鶴子さんの生涯を描いた日韓合作映画「愛の黙示録」の上映会を企画し、木浦市長はじめ木浦市東京訪問団を受け入れ、歓迎会を開催しました。訪問団は板橋区を訪問し、坂本健区長・安井賢光副区長はじめ区幹部のみなさん、石井勉区議会議長を交えて両市の交流推進について話し合いました。訪問団は板橋区内の産業施設および福祉施設を視察しました。

今年３月には、板橋区の福祉関係者が木浦を訪問し、日・韓福祉国際セミナーが行われました。板橋区と木浦市は共に福祉に力を入れている共通点があり、まず福祉分野で交流しようということから今回の福祉セミナーが実現されたのです。

一連の交流がさらに進展し、８月には板橋区議会議員による木浦訪問が実現されることになりました。日韓友好板橋区議会議員連盟（川口雅敏会長）が主催するもので、議連に加盟している自民党・公明党・共産党・民主党・合同クラブなどから 20 余名の議員が参加予定です。また、訪問団は木浦訪問後、大田市東区も訪問予定です。板橋区の国際交流の一助になれば幸いです。

東アジア政経アカデミーは産学公の連携を国際交流に広げるために活動しております。グローバリゼーションの下で地方レベルでの交流はますます重要さを増しています。その橋渡し役として我々東アジア政経アカデミーが役に立てれば幸甚に存じます。

活動報告

大東文化大学特別講義

東アジア政経アカデミー代表　永野慎一郎

当アカデミー永野慎一郎代表は、５月 30 日、大東文化大学大学院経済学研究科特別講師として招かれ、大学院通訳論（田中深雪教授担当）の受講生を対象にした公開授業において「21 世紀における日韓関係を考える」と題して講義を行った。大学院で通訳論を学んでいる大学院生たちの通訳実習を目的として行われるもので、講演全体を院生たちが交代で通訳した。在籍している院生は３人、英国人・タイ人・日本人の顔ぶれでまさしく国際的な組み合わせである。特に、同通訳論コース創設者の近藤正臣名誉教授もコメンテーターとして参加し、英語でコメントおよび質問し、その場で通訳させていた。院生たちの通訳の出来栄えにほぼ満足で、聴講した他の教員たちも通訳論授業のレベルの高さに改めて関心を示していた。彼女たち（３人とも女性）の卒業後の活躍が楽しみである。

研究活動報告

日・韓福祉国際セミナー

東アジア政経アカデミー代表　永野慎一郎

福祉向上のための日・韓福祉国際セミナーが３月２６日、韓国木浦市で開催された。木浦福祉財団と NPO 法人東アジア政経アカデミーが共同開催し、木浦市と社会福祉法人板橋区社会福祉協議会の後援で実施された。

現代社会においてますます深刻化する高齢化および所得格差問題への対応、長期的な展望と課題に対して国際的な視野から板橋区と木浦市の福祉関係者が意見交換し、相互に学び合い、経験やノウハウを共有しようということで企画されたものである。

板橋区からの参加者 11 名は３月 25 日、羽田国際空港を出発、金浦国際空港到着、観光バスに乗って木浦に向かった。天気にも恵まれ西海岸高速道路を４時間走って目的地に到着した。

ホテル玄関で木浦市観光経済局長はじめ担当者たちの出迎えを受け、夕食は骨付きカルビと焼酎やマッカリで軽く一杯。

26 日午前中は木浦の名山儒達山や旧日本領事館、近代歴史館、日本庭園など見学し、木浦市庁訪問、市長主催の歓迎式典と木浦市の紹介があった。昼食はサムゲタン。ホテルに戻り、13：30 から福祉国際セミナーが始まった。

木浦福祉財団李赫永理事長の開会の挨拶から始まり、丁鍾得木浦市長の祝辞、坂本健板橋区長の激励の辞（松浦勉氏代読）、裵鐘凡木浦市議会議長の祝辞など開会式典が行われた。第２部福祉国際セミナーはチョイ・ヘジョン木浦大学教授が座長を務めた。報告者および報告テーマは以下の通りである。

《基調講演》

1．イ・カン（木浦草堂大学教授）「木浦市地域福祉に対する論議と展望」
2．寺谷隆子（JHC 板橋会会長）「共生時代の地域福祉　―現状　～共助・連帯を基礎とした全員参加の支援体制と地域づくり～」

《主題発表》

1．チョイ・ソンヒ（木浦市福祉政策課長）「木浦市の福祉政策：制度と現状」
2．チョン・ビョンスン（木浦市老人福祉館長）「木浦市の地域福祉の発展方案」
3．松浦勉（板橋区前福祉部長）「板橋区の福祉政策：制度と仕組み」
4．中村昭雄（大東文化大学教授）「板橋区の地域福祉～板橋区におけるボランティア・NPO 活動の推移～」

２人の基調講演と４人の主題発表を受けて、シン・セファン木浦下洞老人福祉館長、シム・ジョンヨン木浦 ELAND 老人福祉館長、依田禎子東京都商店街振興組合連合会女性部長、宗像利幸 JHC 板橋会副理事長の指定討論が行われた。総合討論では報告者の他フロアからも質問や意見が出るなど活発な議論が展開された。セミナー終了後木浦市長主催の歓迎晩餐会が開催された。韓国側の報告者および福祉団体関係者と日本からの参加者 20 人が出席した。丁鍾得木浦市長はユニークな乾杯の言葉を披露し会場を沸かした。韓国全羅道方言でいうと特別な味がある。木浦の出席者たちにはうけていた。訳すと、‘これ何ですか’‘酒です’‘いいえ、違います’‘それではなんですか’‘情です’という内容。和やかな雰囲気で次々出てくる新鮮な海の幸に日本からの参加者は大満足であった。

３日目の 27 日は木浦市内福祉施設の視察。最初の訪問先は木浦 ELAND 老人福祉館、木浦市と企業が一体となって経営している自慢の福祉施設、“ホテルのようなサービス”“家族のような福祉館”がモット、市内の 60 歳以上の高齢者 4500 人が登録し、毎日 1000 人が利用している。生き生きしたお年寄りの憩いの場所であった。次は女手一つで戦争孤児 3000 人を養育した映画「愛の黙示録」の主人公田内千鶴子さんの木浦共生園や老人専門療養院、障碍者施設などを訪問した。

６時半から答礼会。木浦訪問でお世話になった木浦市長始め市関係者、市議会議長はじめ議員のみなさん、福祉関係者、木浦市の有志たちを招いての懇談会であった。盛り上がっていた夕食会を急いで切り上げ、市長の命令で木浦訪問団のために特別に用意したといういまや木浦の名物となっている“踊る海上噴水”を観覧するために観覧席に全員勢揃いした。音楽に合わせて“歓迎東京板橋訪問団”“日韓福祉討論会”とレジャー光線の文字が流れた。粋なはからいに感動し、また中国からの留学生たちと輪を作って踊り始めた。まさに日・韓・中の国際親善の夕べであった。

最終日の 28 日はホテルをチェックアウトし、歴史自然博物館など文化施設を急いでまわり、昼食は木浦自慢のアワビ料理であった。日本では中々食べることができないアワビの刺身、焼き物、お粥など量の多さにびっくりしながら満喫して、ＫＴＸ（高速列車）に乗ってソウル経由で、東京に戻った。３泊４日の忙しい日程の木浦訪問であった。

木浦市の歓迎メッセージ

丁鍾得市長と記念写真

国際セミナー関係者たちと記念写真

木浦儒達山彫刻公園にて

会員からの便り①

初めての木浦市訪問

板橋区前福祉部長　松浦　勉

去る３月 25 日から４日間、永野慎一郎先生を団長とする板橋区からの訪問団の一員として、初めて木浦市を訪問した。今回の訪問目的は、板橋区と木浦市の交流を深める一環として福祉面の情報交換や視察を行うことが中心であった。したがって、団のメンバーも福祉事業者や行政・民生委員・ボランティアなど社会福祉関係者であり、福祉セミナーでの発表や討議、施設見学など中身の濃い行程が組まれた。

私は、セミナーで福祉政策についての報告を担当し、発表と質疑応答を行ったが、改めて板橋区の福祉の現状と課題を、木浦市との比較を通して感じることができた。日本は政策の体系化や専門性、人的・財政的資源では誇るべき点があるが、韓国の独居高齢者への手厚い支援策や寄付文化の浸透、政策のスピードなど、学ぶべき点も多々あることを知る貴重な機会となった。

施設見学で印象深かったのは、e-land 老人福祉館と木浦共生園である。前者は、市の指導のもとで運営をミッション系の福祉財団が行っており、施設設備の素晴らしさとともに利用者に沿ったプログラムや活動支援体制に感銘を受けた。後者は、昨年２月に区社協主催の映画会で見た「愛の黙示録」の舞台として是非訪れたかった施設であり、田内千鶴子さんが苦難をものともせず孤児たちのために情熱を捧げた現場にたち、月日を経てなお心に迫るものを感じた。

今回、丁市長をはじめ市当局のはからいで、ユダル山をはじめ風光明媚な市内の名所めぐりや参鶏湯・アワビ料理などの美味・珍味を堪能させていただき、海上噴水ショーを開幕前の特別演示で見ることができたのも感激で、深く感謝している。昨年 10 月に市長・議長一行が板橋を訪問された際に、歓迎会や区内視察などで時間をともにできたご縁から、今回木浦で再会できたことでより交流が深まったと実感している。８月には区議会の木浦訪問も予定されており、今後の交流進展を心から願い報告に換えたい。

至福の人生路

光州市立美術館名誉館長　河　正雄

１９８０年５月１８日光州事件（光州民衆抗争という）が起こった。軍事政権に抗議した光州市民が平和と民主と人権を勝ち取った都市である。また光州は芸郷の都市としても知られている。

１９８０年、私は在日一世画家、全和凰展を開く計画を立て、光州を訪問した。１９８２年、展覧会を開き光州に滞在したが、その時世話になった一盲人の要請を受け盲人福祉協会を設立、そして会館建設の発起人となった。１９８８年、会館の竣工を果たし３０年間支援活動をしてきた。

１９９２年、韓国の地方都市では初めて光州市立美術館が建立された。その美術館を訪問した所、所蔵品は無く美術館とは名ばかりの施設であって、美術館としての機能は果たされていなかった。

光州市から光州市立美術館を支援、育てて欲しい、光州を愛して欲しいとの要請があった事で、私は美術コレクションを寄贈する事となった。２０１２年まで５次に渡り２２００余点の作品を寄贈してきた。

光州市は１９９５年境界を越えて、あらゆる葛藤を乗り越え、世界平和を具現しようという国際美術展光州ビエンナーレを創設した。私はこの構想に賛同し支援、発展の為、寄与してきた。

その業績を認められ、光州市は光州ビエンナーレ館と、光州市立美術館を結ぶ道路１ｋｍを、２０１２年４月３０日河正雄名誉道路と命名したのである。生前の個人に対する名誉道路命名は歴史的、文化的事件である。

１６００年前の歴史、日本との文化交流史で忘れる事の出来ない人物は王仁博士である。王仁博士の故郷は私の父母の故郷、全羅南道霊岩である。

７年前、金逸太霊岩郡守から「光州に沢山の美術品を寄贈しているが何故、父母の故郷にはしてくれないのか。霊岩にあなたの美術館を作りたいので美術品を寄贈して欲しい。」との要請があった。父母の故郷に、錦を飾る喜びで設計し、数々の紆余曲折を乗り越え、いよいよ２０１２年９月３日開館の運びとなった。

霊岩郡はその功績を認め、美術館の名を霊岩郡立河美術館と命名した。木浦から霊岩、光州へと広域文化芸術ベルトがリンクされ結ばれた。河正雄が歩んだ文化芸術の架け橋、共栄共存する地球村が具現され、日本と韓国が一つの庭となった。文化や人的交流が深まる事に希望と夢が拡がる。

私は今、王仁博士の遺徳、父母の故郷あればこその、感謝に満ちた至福の人生を歩んでいる。　（当アカデミー理事）

震災から14カ月、区内外国人減少に歯止め、回復傾向へ

板橋区議会議員　長瀬　達也

板橋区では年々外国人の人口が増え続け、平成 23 年３月時点では 17,679 人となり、区内外国人による消費拡大や地域活性化などが期待されていました。しかし、震災で状況は一変。毎月人口は減り続け、今年３月には 17,002 人まで減少。外国人相手の区内事業者、団体などは影響をもろに受けていました。板橋区赤塚が本部の国際剣道道場「久明館」。剣道留学生や各国の名門企業からの剣道研修生の受け入れも行っている名門道場です。久明館の久保昭館長は、「震災前は年間数百人規模で剣道留学生・研修生を受け入れていた。しかし、原発事故の影響で留学生のキャンセルが相次ぎ運営も厳しい」と語りました。また、区内企業の中には外国人の従業員が原発事故後、勝手に帰国してしまったなどトラブルも。ただ、今年５月、区内外国人人口は 17,302 人と回復傾向に。これは、国・各自治体の放射能対策が一定の効果をあげていることの表れともいえ、板橋区においても、公共施設での放射線量の測定をはじめ、本庁舎における毎日の測定結果公表など対策をすすめ、安心確保への努力が浸透してきました。久明館道場にも外国人留学生が戻りつつあるそうです。政治の役割は国民の生命と財産を守り、安全安心をつくること。今後は給食食材の放射線量測定と公表の確立などさらなる対策強化で安全をアピールする必要があります。　（当アカデミー理事）

会員からの便り②

ソウル通信③ー愛犬パル・韓国との結縁

佐々木　憲文

今回は韓国との個人的関わりを書きます。３月９日、愛犬“パル”が彼岸に旅立ちました。八ヶ岳山麓で生まれ「八」を韓国語読みして“パル”と名付け、その縁あってか、２度にわたって韓国で生活し、この地で逝きました。

恩師・金正年先生はじめ先輩や友人・知人などが弔問にきてくださいました。金先生は、溺愛ぶりを揶揄されながらも闘病中のパルに頻繁に生肉を持ってきてくださいました。梁埈永・兄は、経営する研究院の仕事以上にパルの診療を優先してくれました。パルは、「情の国」の先輩や友人・知人たちとの関係をより深めてくれました。

１年と決めていた滞在も、パルの心臓病悪化で帰国を延期しました。気分転換にマッコリ造りと韓国茶道を習いはじめました。

「創作茶禮研究院」の金福一先生は、高麗時代の茶禮を現代社会に合うよう工夫されて普及・指導されています。茶禮を習うと同時に禅の高僧の謦咳に接する栄に恵まれました。金多山宗師は、独自に考案された座禅法を通じ、活禅の道を説かれる 90 歳の矍鑠たる方で、直接お話をお聴きできる機会を得、禅を修する諸先輩との縁も生まれました。

「宇理禅文化院」の李院長には、茶禮の金先生とパルの四十九日を営んでいただきました。私たちには「最愛の娘」でも他人には「たかが犬」のパルの法要を、人間と同じように執り行ってくださいました。

パルは、私を韓国に誘い、 茶禮に誘い 、茶禮を通して多山宗師の下に導いてくれました。パルは、韓国との縁を深め、新たに結んでくれる娘！でした。パルは、抱きかかえる私の腕の中で力尽き、冷たくなっていきました。大声で呼び止めましたが、戻ってはきませんでした。15 年と 15 日でした。悲しみは消えず和らぎもしませんが、パルが結んでくれたこの韓国との「縁」に感謝し、「縁」を活かしていくことが最大の供養と思えるようになったこの頃です。

（当アカデミー監事）

アカデミー会員募集！

当アカデミーの趣旨に賛同し、入会ご希望の方はお問い合わせください。会員には、正会員（個人・団体）と賛助会員（個人・団体）の２種類あります。正会員は活動に参加するメンバー、賛助会員は財政的な支援のメンバーです。

会員には、講演会・セミナー・視察・調査団等行事への参加、研究成果物などを提供します。

入会金：正会員・賛助会員　5,000 円
年会費：正会員（個人・団体）　5,000 円、
賛助会員（個人・団体）一口 20,000 円
（一口以上）

抵抗の象徴「三別抄」

中央日韓協会理事　薄葉 威士

「抗蒙遺跡地まで」「えっ、抗蒙……？」「そう、三別抄が滅亡したところ」「あんなとこ、韓国人もめったに行かないよ。日本人は初めてだ」済州島でのタクシー運転手とのやりとりである。

13 世紀中ごろ、蒙古支配に対して頑強に抵抗した高麗の組織があった。当時、朝鮮半島は蒙古の支配下に置かれ、高麗はその重圧に呻吟していた。もちろん高麗王朝内での勢力争い等いろいろな事情もあったが、蒙古及びその支配下に置かれた高麗王朝に対抗して、高麗王族の一部を推戴し江華島に立て籠もった三別抄(軍)と称する勢力が抵抗を続けていた。しかし衆寡敵せず、江華島から新天地の珍島に本拠地を移したが、それも持ちこたえられず、最後の抵抗の地、当時「耽羅」と言っていた済州島に移り最後の抵抗を続けた。結果としては、高麗・蒙古連合軍の猛攻でついに滅亡する。

しかし、この三別抄の勢力をつぶすのに、当時の蒙古は相当に手を焼き、フビライが夢に描いた日本(黄金の国ジパング)侵攻の予定は大幅に狂ってしまったという。蒙古支配下の高麗王朝のみでは三別抄の掃討はままならず、蒙古に助力を請い、12,000 の高麗・蒙古連合軍で済州島の三別抄を攻め立て、ついに 1273 年に三別抄の乱を鎮圧した。

その後、蒙古は中国大陸南部の南宋を支配下に置き、蒙古・高麗・南宋の連合軍で日本に押し寄せた。いわゆる弘安の役である。

このように三別抄鎮圧のため日本への二度目の襲来が数年遅れたことは確かなようで、この三別抄の乱がなければ、蒙古・高麗・南宋連合軍が台風で壊滅することもなく九州に上陸し、その後の日本の歴史はどうなっていたか。逆にその 300 年後、文禄・慶長の役で豊臣秀吉が朝鮮に侵攻することもなかったかも……。もちろん歴史に「もし」を持ち込んでも意味はないかもしれないが。

その三別抄の一部が沖縄に逃れ、当時の琉球王朝の隆盛に尽力したなどという、荒唐無稽と言ってしまえばそれまでだが、話としては非常におもしろい。源義経が奥州平泉で死なずに大陸に渡って……という話と同様に。

■編集後記

東アジア政経アカデミーが発足して、はや２年、歳月の経つ早さを痛感致しております。その間、当アカデミーは、永野代表の出身地である韓国木浦市と東京都板橋区の懸け橋となり、まさに日韓民間交流の中枢を担いつつあります。しかもその交流内容は他の民間交流にはない、学術的内容が濃いもので、これも永野代表をはじめ、アカデミー会員の方々のご支援の賜物と感謝の念に堪えません。そして今回もご多用中、貴重な原稿をお寄せ頂いた先生方に厚くお礼申し上げます（大杉由香）。